

【中国】コロナ禍における子どもたちの「心理的レジリエンス」と

「主観的ウェルビーイング」の現状と影響要因

—中国大陸に住む5歳児に関する調査のデータ分析

新型コロナウイルスのパンデミックは世界中の人々にとって青天のへきれきであった。パンデミックがもたらす予期せぬ困難に直面する中で、親子関係や育児形態はどのような影響を受けるのだろうか？ 特に、子どもの心理的レジリエンスと主観的ウェルビーイングはどのように変化するのだろうか？ こうした疑問に答えるため、CRNAはアジア諸国における異文化間研究を企画し、中国もそのメンバーとして参加することになった。私たちは研究の要件に基づき中国・山西省太原市にある Wonderland Education Group 社と提携してアンケート調査に取り組んだ。この調査は「Questionnaire Star」プラットフォーム上で行うオンラインアンケートであり、5歳児の母親264名を対象に2021年9月に行われた。アンケートの回収率および有効性はいずれも100%であった。本レポートでは調査で収集したデータの分析結果を報告する。

1. サンプルの分析

本セクションでは、中国に住む5歳児およびその家族に関して収集したデータを記述統計により集計し、その結果について述べる。

1.1 サンプル

本調査のサンプルは5歳児(調査対象児童)およびその家族である。

1.1.1 調査対象児童の構成

表 1-1 中国の調査対象児童の性別と年齢

		n	%
子の性別	1 男子	138	52.3
	2 女子	126	47.7
	無回答	0	0.0
子の年齢 5歳児	1 5歳0ヶ月～2ヶ月	63	23.9
	2 5歳3ヶ月～5ヶ月	84	31.8
	3 5歳6ヶ月～8ヶ月	76	28.8
	4 5歳9か月～11ヶ月	41	15.5
	無回答	0	0.0

1.1.2 調査対象児の家族に関する基礎情報

家族の基礎情報として、「同居している家族(核家族の有無)」、「親の職業」、「親の学歴」、「世帯収入」といったデモグラフィック変数のデータを収集し、記述統計により集計した。

表 1-2 回答者(母親)と同居している家族(お手伝いさん等含む)

		2 中国	
		n	%
同居している人	1 対象のお子様	218	82.6
	2 対象のお子様のきょうだい	96	36.4
	3 配偶者・パートナー	232	87.9
	4 あなたの父親	29	11.0
	5 あなたの母親	53	20.1
	6 配偶者・パートナーの父親	37	14.0
	7 配偶者・パートナーの母親	49	18.6
	8 親戚	5	1.9
	9 お手伝いさん	10	3.8
	10 その他	5	1.9
	無回答	0	0.0

表 1-3 母親と配偶者の職業

	n	%	n	%
常勤職(正社員・正職員) ※テレワーク含む	166	62.9	177	67.0
パート・アルバイト	8	3.0	4	1.5
契約社員・派遣社員	18	6.8	13	4.9
内職	14	5.3	5	1.9
雇用主	1	0.4	0	0.0
自営業・家族従業	12	4.5	45	17.0
農林漁業	0	0.0	0	0.0
主婦・主夫(家事に専念・家事専従)	32	12.1	0	0.0
学生	0	0.0	0	0.0
無職	2	0.8	1	0.4
その他	11	4.2	16	6.1
配偶者・パートナーはいない			3	1.1

表 1-4 母親と配偶者の学歴

	母親		父親	
	n	%	n	%
1 小学校	0	0.0	0	0.0
2 中学校	4	1.5	6	2.3
3 高校	12	4.5	13	4.9
4 専門学校	3	1.1	5	1.9
5 短大（三年制）	55	20.8	54	20.5
6 大学	145	54.9	139	52.7
7 修士	42	15.9	41	15.5
8 博士	2	0.8	2	0.8
9 その他	1	0.4	1	0.4
10 配偶者・パートナーはいない	0	0.0	3	1.1

表 1-5 調査対象児の家庭の世帯収入

		n	%
世帯収入 中国	1 無収入(0円)	0	0.0
	2 7.5万円未満	17	6.4
	3 7.5万～15万円未満	83	31.4
	4 15万～37.5万円未満	100	37.9
	5 37.5万～60万円未満	16	6.1
	6 60万～90万円未満	5	1.9
	7 90万元以上	6	2.3
	8 わからない・回答したくない	37	14.0
	無回答	0	0.0

表 1-6 コロナ禍以前と比べた場合の世帯収入の変化

		n	%
コロナに よる収入 変化	1 無収入	2	0.8
	2 減少した	107	40.5
	3 変わらない	111	42.0
	4 増加した	17	6.4
	5 わからない・回答したくない	27	10.2

1.2 サンプルの特徴

1.2.1 調査対象児の特徴

調査対象児の男女の割合はほぼ同じであり、年齢は5歳0ヶ月～11ヶ月を対象としている。表 1-1 で明らかなように、男子の数が女子の数をわずかに上回ってお

り、最も多い年齢層は5歳3ヵ月から8ヵ月である。概して、調査対象児の男女比率と年齢分布は適切にバランスがとれたものとなっている。

1.2.2 調査対象児の家族の特徴

調査対象児の大半は核家族として両親と暮らしている。表 1-2 で明らかなように、調査対象児の家族は核家族がほとんどである。大半の子どもたちは両親と暮らしており、少数のみが祖父母を含む大家族で暮らしていた。

両親の過半数が常勤職に就いており、短大(3年制)または大学の卒業者であり、年収は平均レベルとなっている。

表 1-3 が示すように、調査対象児の父母の60%以上が常勤職に就いている。また、父親の17%が自営業、母親の12%が主婦であった。表 1-4 は両親の学歴をまとめたものである。父母のそれぞれ70%が短大(3年制)または大学を卒業しており、15~16%が修士号を取得している。表 1-5 は調査対象児童の家族の年収をまとめたものであるが、家族の37.9%が中国の平均年収「15万~37.5万元」に該当しており、31.4%がこの平均値をやや下回る年収となっている。また、家族の40.5%はコロナ禍以前に比べて収入が減少したと答えている。このことから、パンデミックは家庭の世帯収入にある程度ネガティブな影響を及ぼしていることが伺われる。

家族に関する分析結果をまとめると、中国の都市に住む5歳の調査対象児の家族は比較的高い学歴をもち、中産階級レベルの収入を得ていることがわかった。

2. 現状と影響要因

今回の異文化間研究は、コロナ禍における子どもたちの「心理的レジリエンス」と「ウェルビーイング」の現状および影響要因に焦点を当てている。従って、本調査でもこの2つの主変数に基づいてデータ分析を行い、その結果を本レポートで報告する。

2.1 中国に住む子どもたちの「心理的レジリエンス」

本調査では、PMK-CYRM-R 尺度(子どものことを最もわかっている者による児童・青少年のレジリエンス調査)を用いて、5歳児の「レジリエンス」に関する母親の回答データを収集した。母親の回答は主観やバイアスが入り混じる可能性もあるが、本調査では編集を加えずにそのままの状態で行った。

2.1.1 単純集計

CYRM-R の構成によると、Q6 は子どもの「心理的レジリエンス」を子ども自身の体験(パーソナルレジリエンス)と、両親／養育者との関わりで体験するもの(保護者・養育者レジリエンス)という2つの下位項目に分けることができる。表 2-1 は、全体的なレジリエンスと2つの下位項目のレジリエンスについて、記述統計により分析した結果をまとめたものである。

表 2-1 中国に住む 5 歳児のレジリエンス(平均値と標準偏差)

	平均	標準偏差	サンプル数
Q6 全体的なレジリエンス	4.423	.630	264
Q6 パーソナルレジリエンス	4.348	.642	264
Q6 保護者・養育者レジリエンス	4.530	.666	264

CYRM-R 尺度では 1~5 のスコアで算定する。スコアが高いほど、子どものレジリエンスは強いものとみなされる。表 2-1 が示すように、母親の回答に基づく分析の結果、5 歳児の「心理的レジリエンス」のスコアは高く、特に「保護者・養育者レジリエンス」が高いことがわかる。

2.1.2 グループ間の比較

本稿のスペースに限りがあることから、ここではグループ間で有意な差異が見られた変数のみを選んで分析を行った。

2.1.2.1 月齢別グループの比較

図 2-1 は、5 歳児を月齢別に 4 つのグループに分け、レジリエンスの比較を行ったものである。

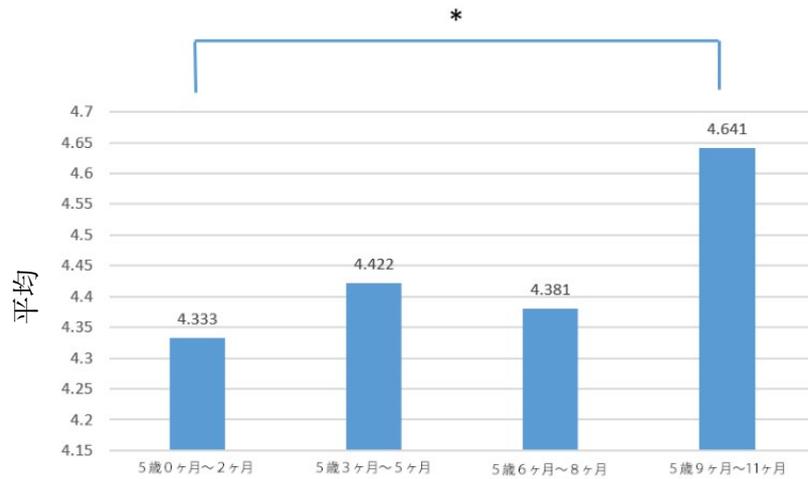


図 2-1 5歳児の「レジリエンス」の比較(月齢別)

図 2-1 が示すように、5歳 9～11 ヶ月の子どもは5歳 0～2 ヶ月の子どもよりも「レジリエンス」のスコアが高いことから ($P < .05$)、年齢(月齢)による差異があることがわかる。

2.1.2.2「母親の育児分担」に基づく子どもの「レジリエンス」の比較

図 2-2 は、「母親の育児分担」という変数に基づき、子どもの「レジリエンス」のスコアを比較したものである。

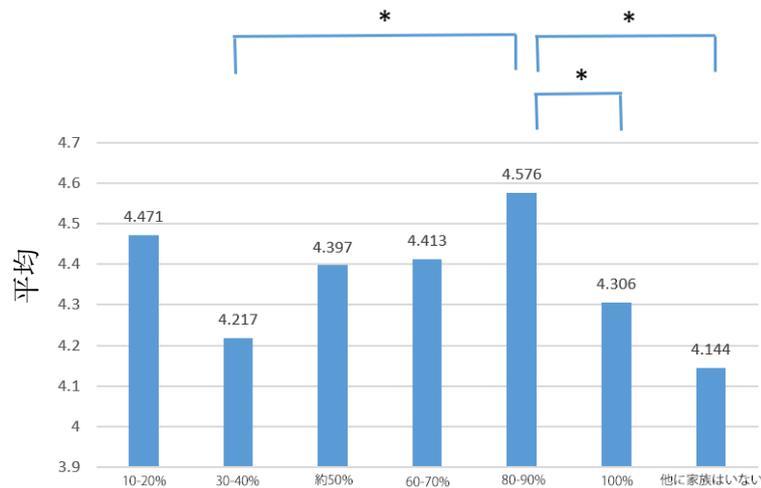


図 2-2 「母親の育児分担」に基づく子どもの「レジリエンス」の比較

図 2-2 を見ると、母親の育児分担率が 80-90%であるグループが最も高い「レジリエンス」のスコアを示している。このスコアを、母親の育児分担率が 30-40%のグループ、100%のグループ、およびシングルマザー・グループのスコアと比較すると、大きな差異があることがわかる($P < .05$)。従って、忙しく働く母親は子どもに辛い思いをさせている可能性があるが、家族のサポートを得られないシングルマザーは子どもの心理的な感情を考慮する余裕がないために子どもの「心理的レジリエンス」のスコアが低くなっていることが考えられる。また、母親の育児分担率が低いグループは子どもの「レジリエンス」のスコアも低い。このことから、子どもの「心理的レジリエンス」の発達に影響があるため、母親は家族のサポートを受けながら育児に費やす時間を増やすことが重要であると思われる。

2.1.2.3 「母親／配偶者の職業」に基づく子どもの「レジリエンス」の比較

図 2-3 と図 2-4 は、「母親と配偶者の職業」という変数に基づき、子どもの「レジリエンス」のスコアを比較したものである。

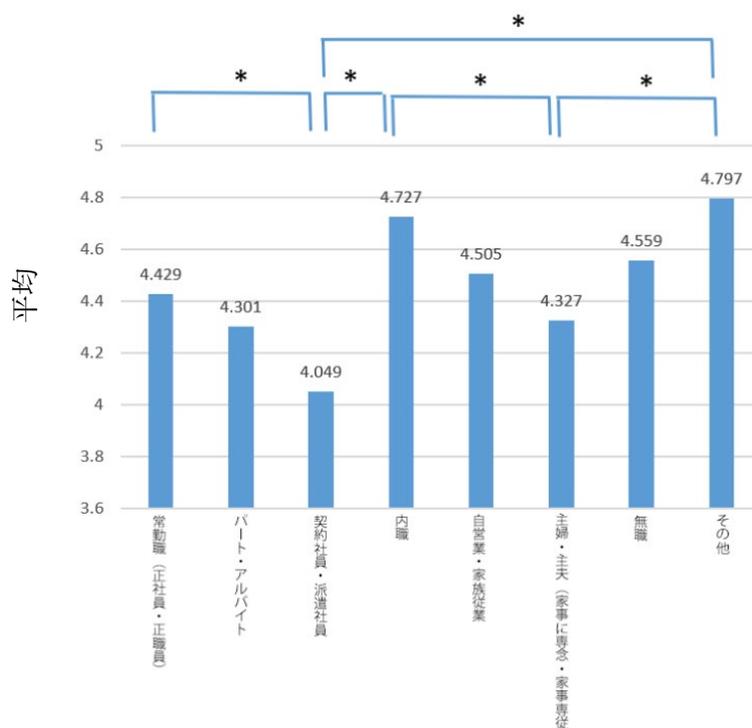


図 2-3 「母親の職業」に基づく子どもの「レジリエンス」の比較

図 2-3 を見ると、母親が「内職」または「その他」の場合、子どもの「心理的レジリ

「レジリエンス」は最も高いスコアを示している。また、母親が「常勤職」の場合も、比較的高いスコアとなっている。一方、母親が「契約社員」である場合、子どもの「レジリエンス」のスコアは最も低く、母親が「パート・アルバイト」の場合も次に低いスコアとなっている。高いスコアのグループと低いスコアのグループとの間には有意な差異が確認された ($P < .05$)。

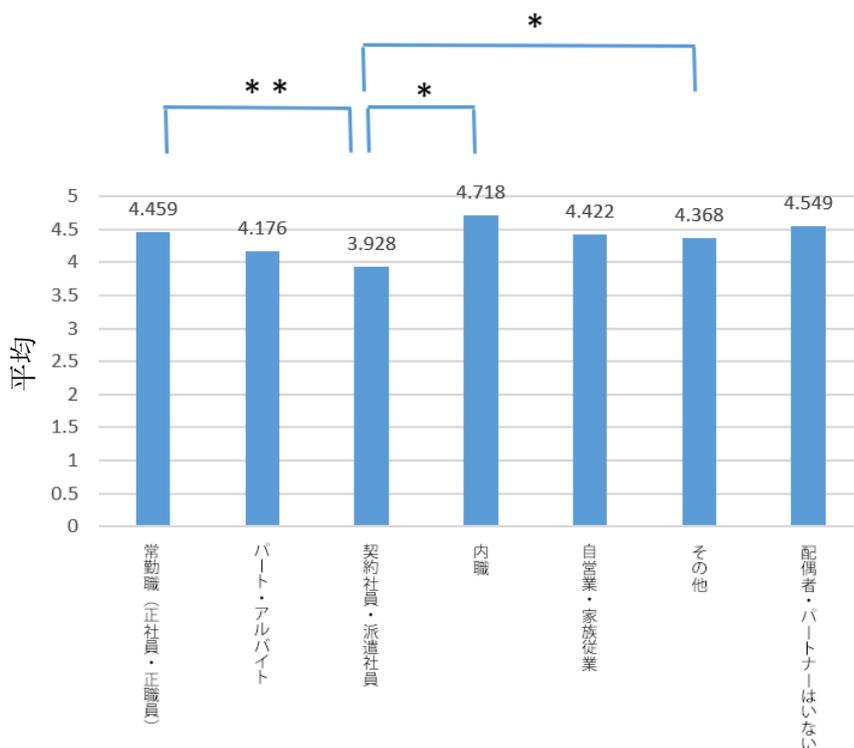


図 2-4 「父親の職業」に基づく子どもの「レジリエンス」の比較

図 2-4 を見ると、父親の職業は、母親の職業ほどには子どもの「心理的レジリエンス」に大きな差異を生じさせていないことがわかる。「心理的レジリエンス」のスコアが最も低いのは父親が「契約社員」の場合である。

このことから、母親や配偶者の不安定な職業が子どもとのコミュニケーションの質に影響を及ぼし、子どもの「レジリエンス」のスコアが比較的低い理由となっていることが伺われる。

2.1.2.4 「子どものデジタルメディア活用に対する母親の抵抗感」に基づく子どもの「レジリエンス」の比較

アンケートの Q11 は、子どもの娯楽・遊びとしてのデジタルメディア活用に対する母親の抵抗感を測るものとして、「抵抗感がある」、「以前は抵抗感があったが、今はない」、「以前は抵抗感がなかったが、今はある」、「抵抗感がない」の 4 つの回答選択肢を提示した。図 2-5 は、こうした母親の抵抗感の度合いに基づき、子どもの「レジリエンス」のスコアを比較したものである。

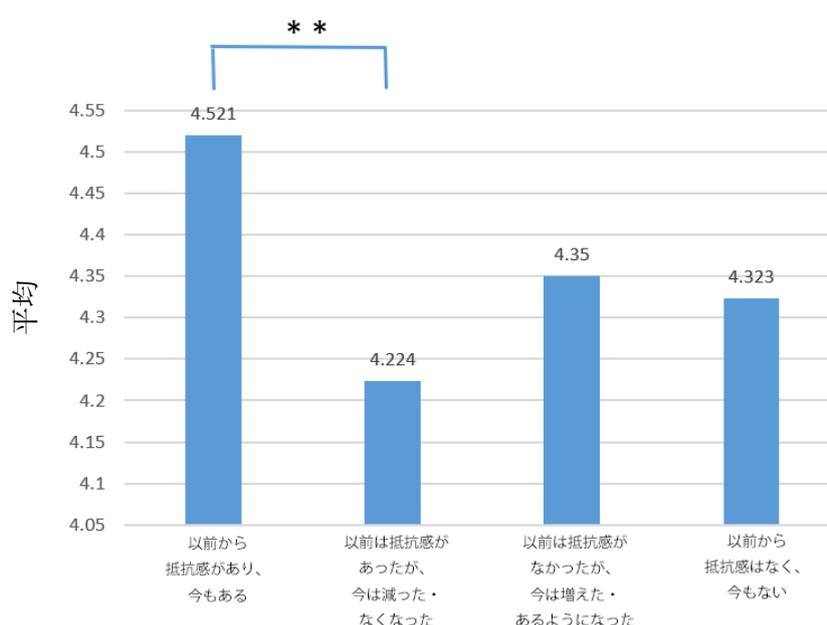


図 2-5 「子どものデジタルメディア活用に対する母親の抵抗感」に基づく子どもの「レジリエンス」の比較

図 2-5 が示すように、子どもの娯楽・遊びとしてのデジタルメディア活用に対し、一貫して反対している母親の場合、子どもの「レジリエンス」のスコアは最も高く ($P < .01$)、「以前は抵抗感があったが、コロナ禍で考えが変わった」と答えた母親の場合のスコアと比べて大きな差異がある。このことから、子どもの娯楽・遊びとしてのデジタルメディア活用に対する母親の一貫した抵抗感が、子どもの「心理的レジリエンス」の向上に寄与したと思われる。

2.1.2.5 「母親の養育態度」に基づく子どもの「レジリエンス」の比較

アンケートの Q8 は、母親の養育態度に焦点を当てた質問である。スコアが低いほど、親子関係が密接であり、母親が積極的に子どもをサポートしていることを示す。スコアは 10~40 の範囲で算定する。スコアが 10~20 のグループは「肯定的な養育態度」の高群母親グループ、スコアが 30~40 のグループは「肯定的な養育態度」の低群母親グループとした。この養育態度を変数として、2 つのグループの間でレジリエンスのスコアを比較した。図 2-6 は、その結果をまとめたものである。

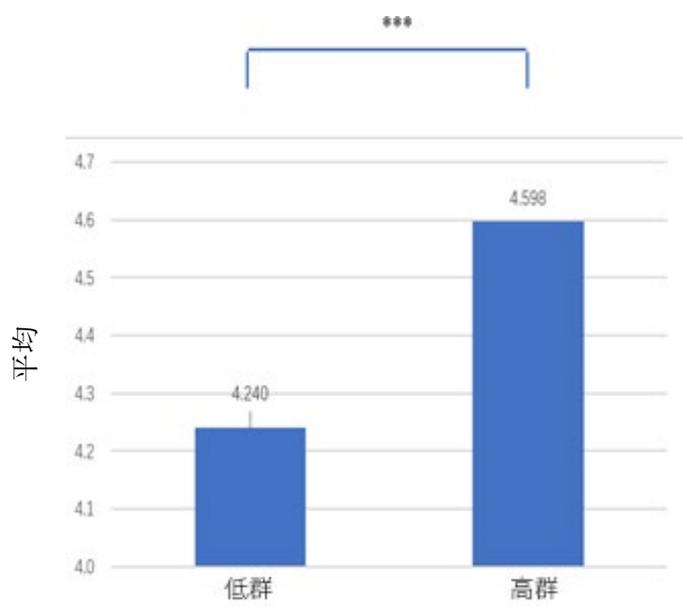


図 2-6 「母親の養育態度」に基づく子どもの「レジリエンス」の比較

図 2-6 が示すように、母親の養育態度は子どもの「心理的レジリエンス」に大きな影響を及ぼしている。子どもを積極的にサポートし、愛情ある世話としつけをしている母親(高群)の場合、子どもの「心理的レジリエンス」のスコアは、積極的なサポートやしつけのない子育て意識と態度の母親(低群)の場合と比べ、大きく差をつけて高い数値となっている($p < .001$)。従って、子どもが求めることに応え、懲罰的でない母親の養育態度は、子どもの「心理的レジリエンス」の発達を促すと結論付けることができる。

2.1.2.6 「母親が子育てで力を入れていること」に基づく子どもの「レジリエンス」の比較

アンケートの Q17 は、回答者である母親の「子育てで力を入れていること」に焦点を当てたものである。スコアが低いほど、母親の子育て意識が高いことを示す。スコアは 15~60 の範囲で算定する。スコアが 15~30 のグループは「子育てで力を入れていること」が多い高群母親グループ、スコアが 45~60 のグループは「子育てで力を入れていること」が少ない低群母親グループとした。「子育てで力を入れていること」を変数として、2 つのグループの間でレジリエンスのスコアを比較した。図 2-7 は、その結果をまとめたものである。

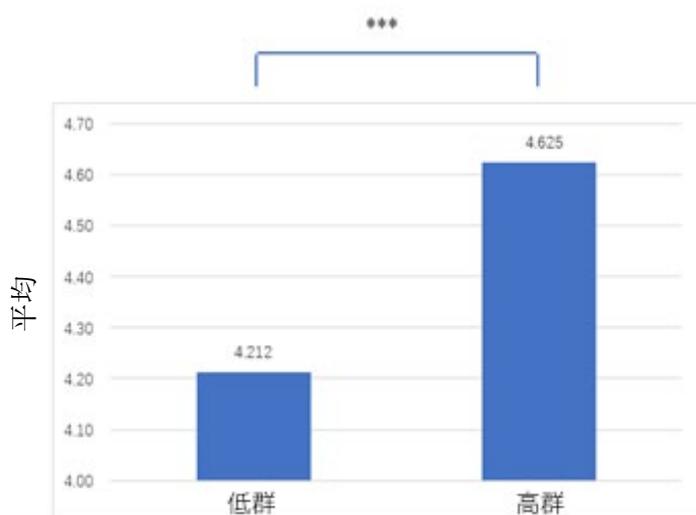


図 2-7 「母親が子育てで力を入れていること」に基づく子どもの「レジリエンス」の比較

図 2-7 が示すように、母親の「子育てで力を入れていること」は、子どもの「心理的レジリエンス」に大きな影響を及ぼしている。「子育てで力を入れていること」が多い高群母親グループの場合、子どもの「心理的レジリエンス」のスコアは、「子育てで力を入れていること」が少ない低群母親グループの場合と比べ、大きく差をつけて高い数値となっている ($p < .001$)。従って、母親が子育てで力を入れていることが多いほど、子どもの「心理的レジリエンス」の発達が促されると思われる。

2.1.2.7 「子育てや生活に対する母親の満足度」に基づく子どもの「レジリエンス」の比較

アンケートの Q20 は、子育て、仕事、家庭生活など、現在の生活に対する母親の満足度に焦点を当てたものである。スコアが低いほど、母親の満足度が高いことを示す。スコアは 5~25 の範囲で算定する。スコアが 5~10 のグループは「母親の生活満足度」が高い母親グループ、スコアが 20~25 のグループは「母親の生活満足度」が低い母親グループとした。「母親の生活満足度」を変数として、2 つのグループの間でレジリエンスのスコアを比較した。図 2-8 は、その結果をまとめたものである。

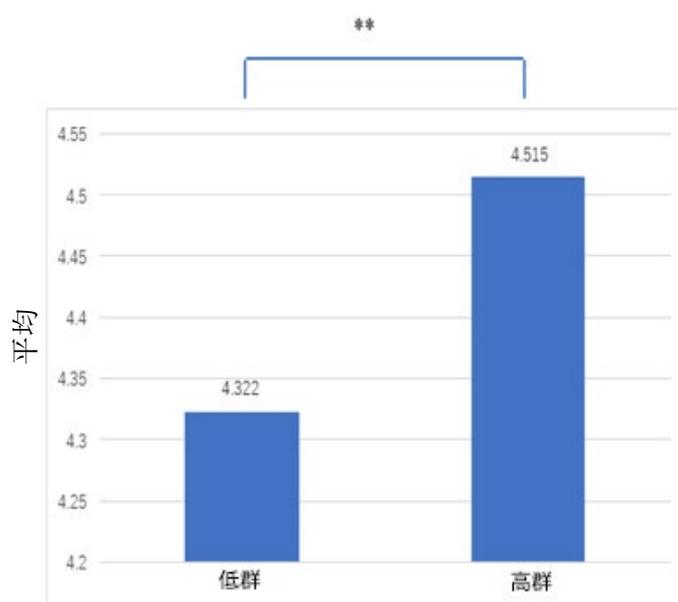


図 2-8 「母親の生活満足度」に基づく子どもの「レジリエンス」の比較

図 2-8 が示すように、「母親の生活満足度」は、子どもの「心理的レジリエンス」に大きな影響を及ぼしている。「母親の生活満足度」が高い母親グループの場合、子どもの「心理的レジリエンス」のスコアは、「母親の生活満足度」が低い母親グループの場合と比べ、大きく差をつけて高い数値となっている ($p < .01$)。従って、現在の子育て、仕事、生活に対する母親の満足度が高いほど、子どもの「心理的レジリエンス」の発達が促されると思われる。

ここまでの分析をまとめると、まず、中国に住む子どもたちの「レジリエンス」の合

計スコアは、かなり高いことがわかった。グループ間分析の結果、以下の変数が有意または大きな影響を及ぼしていることも明らかになった。

子どもたち自身に焦点を当てた場合、月齢の高い子どもの方が月齢の低い子どもよりも「レジリエンス」のスコアが高く、子どもの発達過程が重要な要因であることが伺われる。

デモグラフィック変数に関しては、親の職業もまた子どものレジリエンスに影響を与えていることがわかった。安定した職業をもつ親の場合、子どもの「レジリエンス」のスコアは、不安定な職業(パートタイムや契約社員など)の親の場合と比べ、大幅に高くなっている。

母親の主観的な感情および養育態度に関しては、子どもが求めることに応え、懲罰的でない養育態度を示し、子育てで力を入れていることが多くあり、子育てに満足しており、娯楽としてのデジタルメディアの使用を厳しく管理している母親グループの方が、そうでないグループよりも、子どもの「心理的レジリエンス」のスコアが高かった。

2.2 中国に住む子どもたちの「主観的ウェルビーイング」の現状

本調査では、KINDL (QOL 尺度)を用いて、5 歳児の主観的ウェルビーイングに関する母親の回答データを収集した。母親の回答は主観やバイアスが入り混じる可能性もあるが、本調査では編集を加えずにそのままの状態で行った。

2.2.1 単純集計

QOL 尺度のアンケートの構成によると、Q7 は 6 つの下位項目に分けられる。すなわち、Q7-1~Q7-4 は「身体的 QOL」、Q7-5~ Q7-8 は「心理的 QOL」、Q7-9~ Q7-12 は「自尊感情」、Q7-13~ Q7-16 は「家族関係の QOL」、Q7-17~ Q7-20 は「友達関係の QOL」、Q7-21~ Q7-24 は「日常機能(学校/園)」に関する質問である。従って、表 2-2 は、全体的なウェルビーイングと 6 つの下位項目のウェルビーイングについて記述統計分析を行った結果を表したものである。

表 2-2 中国に住む 5 歳児の主観的ウェルビーイング (平均値と標準偏差)

	M	SD	N
全体	4.193	0.491	264
身体的QOL	4.424	0.597	264
心理的QOL	4.152	0.632	264
自尊感情	4.169	0.745	264
家族関係のQOL	4.011	0.561	264
友達関係のQOL	4.205	0.588	264
日常機能 (学校/園)	4.2	0.574	264

QOL 尺度では、1~5 の尺度を使用してスコアを算定する。スコアが高いほど、子どもの主観的ウェルビーイングは強いものとみなされる。表 2-2 が示すように、母親の回答に基づく分析の結果、中国に住む 5 歳児の「主観的ウェルビーイング」のスコアは高く、特に「身体的 QOL」、「友達関係の QOL」、「学校/園」の順で優れており、「家族関係の QOL」が最も低いことがわかった。

2.2.2 グループ単位の比較

本稿のスペースに限りがあることから、ここではグループ間で有意な差異が見られた変数のみを選んで分析を行った。

2.2.2.1 「母親の育児分担」に基づく子どもの「主観的ウェルビーイング」の比較

「母親の育児分担」の割合と子どもの「主観的ウェルビーイング」との関連性を明確に把握するために、Q18(「あなたと配偶者/パートナーの子育て・家事の分担のうち、あなたが分担している割合はどれくらいですか?」)に対する 8 通りの回答を 4 つのグループに振り分けた。すなわち、グループ 1(受け持っている割合=5 割以下)、グループ 2(60-70%)、グループ 3(80-90%)、グループ 4(100%またはシングルマザー)とした。図 2-9 は、「母親の家事育児分担」という変数に基づく子どもの「主観的ウェルビーイング」のスコアを比較したものである。

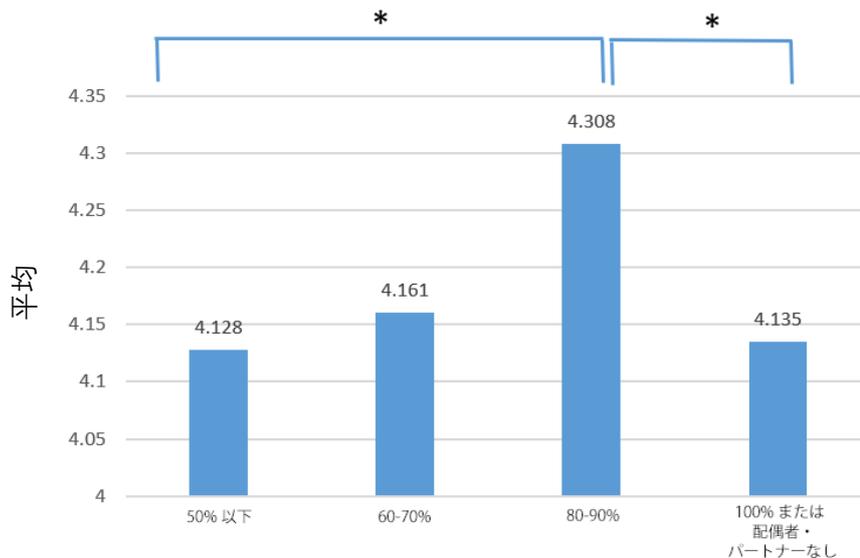


図 2-9 「母親の家事育児分担」に基づく子どもの「主観的ウェルビーイング」の比較

図 2-9 を見ると、母親の家事育児分担率が 80-90%であるグループが最も高い「主観的ウェルビーイング」のスコアを示している。このスコアを、母親の家事育児分担率が 50%以下のグループ、100%のグループ、およびシングルマザー・グループのスコアと比較すると、大きな差異があることがわかる($P < 0.05$)。従って、忙しく働く母親が育児・家事を分担する比率が大きいほど、子どもと過ごす時間が増え、子どもの幸福感が高まるが、育児分担率が低い母親や、育児に関して家族のサポートを受けていない母親は、子どもとのコミュニケーションの時間が限られているため、子どもの「主観的ウェルビーイング」のスコアが低くなっていると思われる。このことから、母親は家族のサポートを受けて育児に費やす時間を増やし、子どもの「主観的ウェルビーイング」を高めることが重要であろう。

2.2.2.2 「母親／配偶者の職業」に基づく子どもの「主観的ウェルビーイング」の比較

図 2-10 と図 2-11 は、「母親と配偶者の職業」という変数に基づき、子どもの「主観的ウェルビーイング」のスコアを比較したものである。

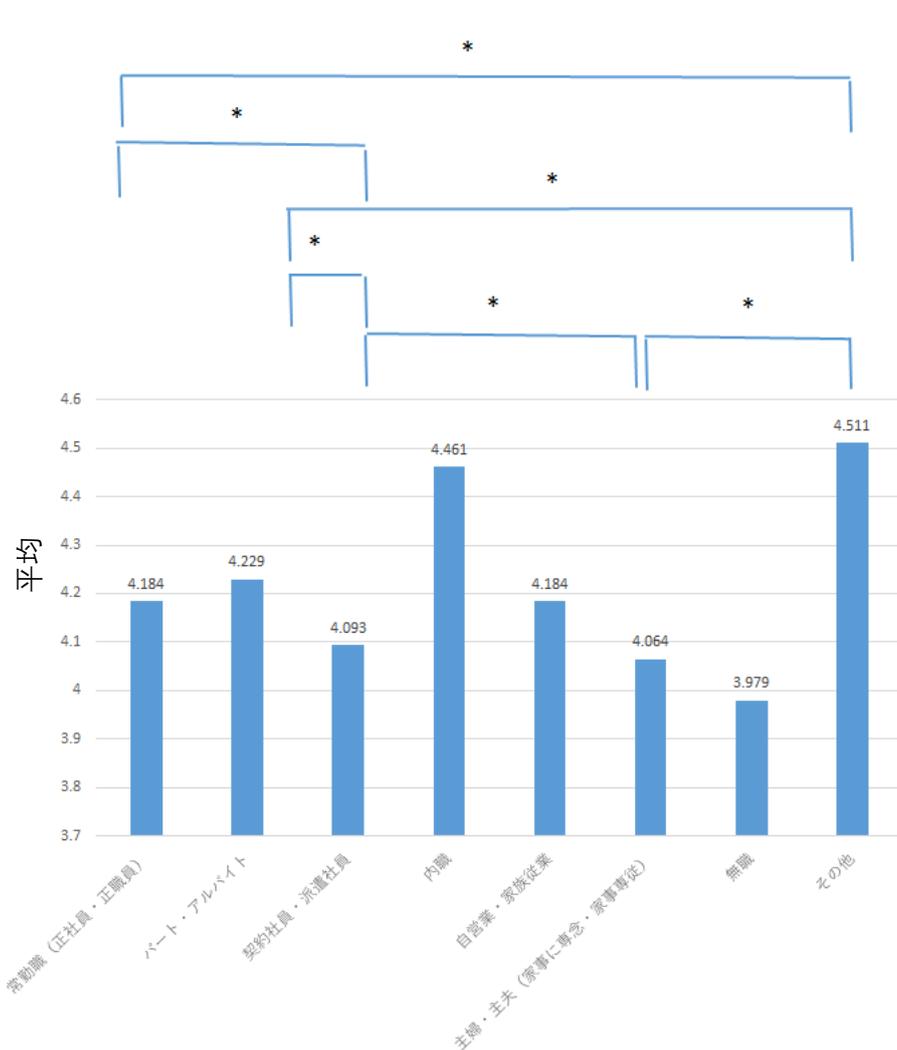


図 2-10 「母親の職業」に基づく子どもの「主観的ウェルビーイング」の比較

図 2-10 を見ると、母親が「内職または「その他」の場合、子どもの「主観的ウェルビーイング」は最も高いスコアを示している。また、母親が「常勤職」の場合も、比較的高いスコアとなっている。一方、母親が「契約社員」、特に「無職」である場合、子どもの「主観的ウェルビーイング」は最も低いスコアとなっている。高いスコアのグループと低いスコアのグループとの間には有意な差異が確認された ($P < 0.05$)。母親の職業が「その他」の場合、子どもの「主観的ウェルビーイング」は、母親が「無職」の場合に比べ、大きく差をつけて高いスコアとなっている ($P < .01$)。このことから、子どもの「主観的ウェルビーイング」は母親の経済状態に左右されることが伺われる。

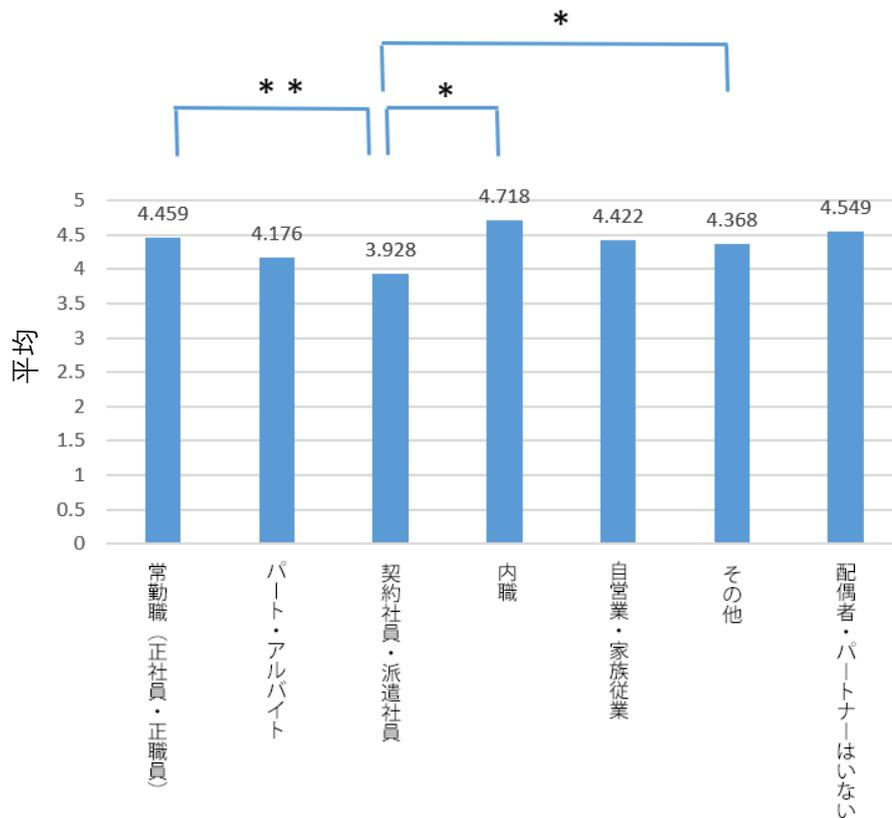


図 2-11 「父親の職業」に基づく子どもの「主観的ウェルビーイング」の比較

図 2-11 が示すように、父親の職業によって子どもの「主観的ウェルビーイング」には有意な差異が生じることがわかる。父親が「内職」の場合、主観的ウェルビーイングのスコアは最も高く、父親が「パートタイム」および「契約社員」の場合は最も低く、「常勤職」や「自営業」の場合よりも低いスコアとなっている ($P < .01$)。

このことから、母親や配偶者／パートナーの不安定な職業が子どもとのコミュニケーションの質に影響を及ぼし、子どもの「主観的ウェルビーイング」のスコアが低い理由となっていることが伺われる。

2.2.2.3 「子どものデジタルメディア活用に対する母親の抵抗感」に基づく子どもの「主観的ウェルビーイング」の比較

アンケートの Q11-1 は、コロナ禍以前と比べた場合の、子どもの娯楽・遊びとしてのデジタルメディア活用に対する母親の抵抗感の変化を調べる質問である。回答の選択肢として、「以前から抵抗感があり、今もある」、「以前は抵抗感があったが、今はない」、「以前は抵抗感がなかったが、今はある」、「以前から抵抗感はなく、今も

ない」の4つの回答を提示した。図 2-12 は、こうした母親の抵抗感の度合いに基づき、子どもの「主観的ウェルビーイング」のスコアを比較したものである。

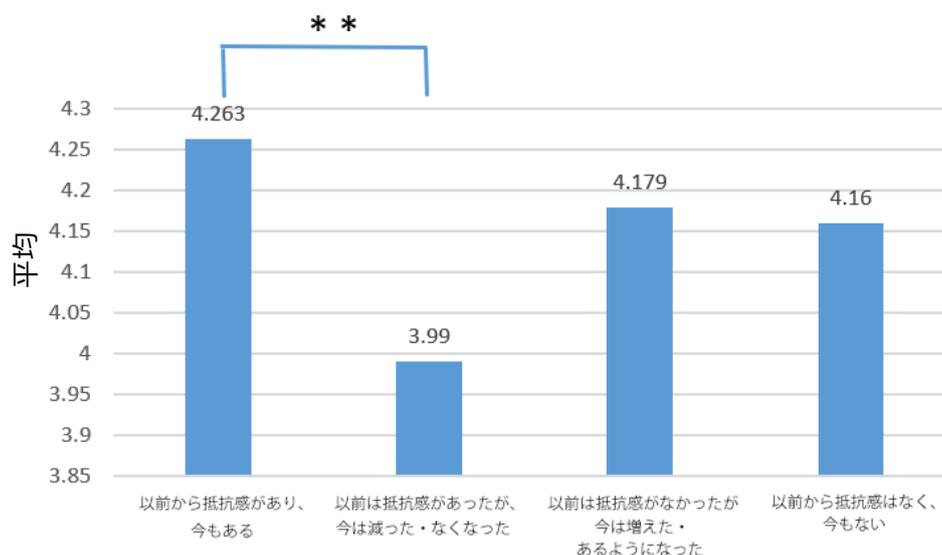


図 2-12 「子どものデジタルメディア活用に対する母親の抵抗感」に基づく子どもの「主観的ウェルビーイング」の比較

図 2-12 が示すように、子どもの娯楽・遊びとしてのデジタルメディア活用に対し、一貫して反対している母親の場合、子どもの「主観的ウェルビーイング」のスコアは最も高く($P < .01$)、「以前は抵抗感があったが、コロナ禍で考えが変わった」と答えた母親の場合のスコアと比べて大きな差異がある。このことから、子どもの娯楽・遊びとしてのデジタルメディア活用に対する母親の一貫した抵抗感が、子どもの「主観的ウェルビーイング」の向上に寄与したと思われる。

2.2.2.4 「母親の養育態度」に基づく子どもの「主観的ウェルビーイング」の比較

アンケートの Q8 は、母親の養育態度に焦点を当てた質問である。スコアが低いほど、親子関係が密接であり、母親が積極的に子どもをサポートしていることを示す。スコアは 10~40 の範囲で算定する。スコアが 10~20 のグループは「肯定的な養育態度」の高群母親グループ、スコアが 30~40 のグループは「肯定的な養育態度」の低群母親グループとした。この養育態度を変数として、2つのグループの間で主

観的ウェルビーイングのスコアを比較した。図 2-13 は、その結果をまとめたものである。

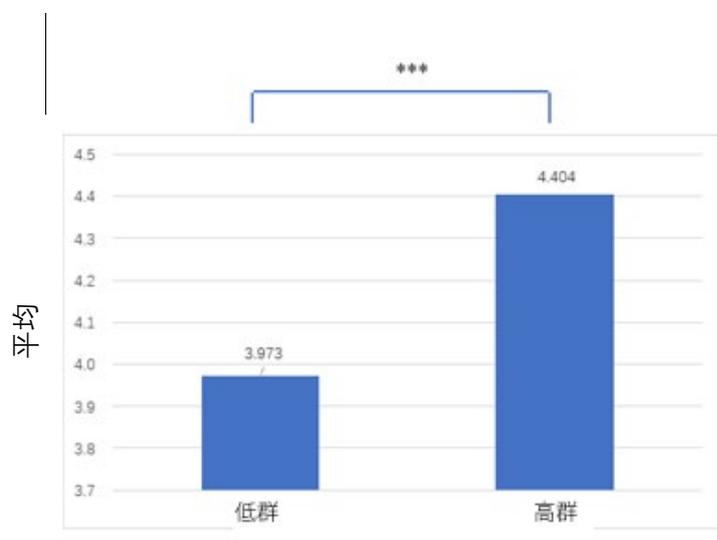


図 2-13 「母親の養育態度」に基づく子どもの「主観的ウェルビーイング」の比較

図 2-13 が示すように、母親の養育態度は子どもの「主観的ウェルビーイング」に大きな影響を及ぼしている。子どもを積極的にサポートし、愛情ある世話としつけをしている母親(高群)の場合、子どもの「主観的ウェルビーイング」のスコアは、積極的なサポートやしつけのない養育態度の母親(低群)の場合と比べ、大きく差をつけて高い数値となっている($p < .001$)。従って、子どもが求めることに応え、懲罰的でない母親の養育態度は、子どもの「主観的ウェルビーイング」の発達を促すと結論付けることができる。

2.2.2.5 「母親が子育てで力を入れていること」に基づく子どもの「主観的ウェルビーイング」の比較

アンケートの Q17 は、母親の「子育てで力を入れていること」に焦点を当てたものである。スコアが低いほど、母親の子育て意識が高いことを示す。スコアは 15~60 の範囲で算定する。スコアが 15~30 のグループは「子育てで力を入れていること」が多い高群母親グループ、スコアが 45~60 のグループは「子育てで力を入れていること」が少ない低群母親グループとした。「子育てで力を入れていること」を変数として、2 つのグループの間で主観的ウェルビーイングのスコアを比較した。図 2-

14 は、その結果をまとめたものである。

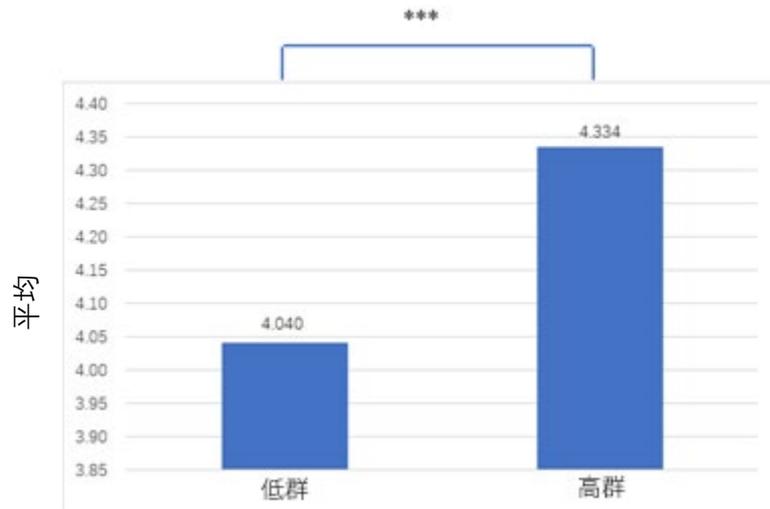


図 2-14 「母親が子育てで力を入れていること」に基づく
子どもの「主観的ウェルビーイング」の比較

図 2-14 が示すように、母親の「子育てで力を入れていること」は、子どもの「主観的ウェルビーイング」に大きな影響を及ぼしている。「子育てで力を入れていること」が多い高群母親グループの場合、子どもの「主観的ウェルビーイング」のスコアは、「子育てで力を入れていること」が少ない低群母親グループの場合と比べ、大きく差をつけて高い数値となっている ($p < .001$)。従って、母親が子育てで力を入れていることが多いほど、子どもの「主観的ウェルビーイング」の発達が促されると思われる。

2.2.2.6 「子育てや生活に対する母親の満足度」に基づく子どもの「主観的ウェルビーイング」の比較

アンケートの Q20 は、子育て、仕事、家庭生活に対する母親の満足度に焦点を当てたものである。スコアが低いほど、母親の満足度が高いことを示す。スコアは 5~25 の範囲で算定する。スコアが 5~10 のグループは「母親の生活満足度」が高い高群、スコアが 20~25 のグループは「母親の生活満足度」が低い低群とした。「母親の生活満足度」を変数として、2 つのグループの間で主観的ウェルビーイングのスコアを比較した。

その結果、母親の「子育てや生活に対する満足度」は、子どもの「主観的ウェルビーイング」に大きな影響を及ぼしている。「子育てや生活に対する満足度が高い」母親グループの場合、子どもの「主観的ウェルビーイング」のスコアは、「子育てや生活に対する満足度が低い」母親グループの場合と比べ、大きく差をつけて高い数値となっている($P < .01$)。従って、現在の子育て、仕事、生活に対する母親の満足度が高いほど、子どもの「主観的ウェルビーイング」の発達が促されると思われる。

ここまでの分析をまとめると、まず、中国に住む子どもたちの「主観的ウェルビーイング」の合計スコアはかなり高いことがわかった。グループ間分析の結果、以下の変数が有意または大きな影響を及ぼしていることも明らかになった。

デモグラフィック変数に関しては、親の職業も子どもの主観的ウェルビーイングに影響を与えていることがわかった。安定した職業を持つ親の場合、子どもの「主観的ウェルビーイング」のスコアは、不安定な職業(パートタイムや契約社員など)の親の場合と比べ、大幅に高くなっている。

母親の主観的な感情および養育態度に関しては、子どもが求めることに応え、懲罰的でない養育態度を示し、子育てで力を入れていることが多くあり、娯楽としてのデジタルメディアの使用を厳しく管理している母親グループの方が、そうでないグループよりも、子どもの「主観的ウェルビーイング」のスコアが高かった。

2.3 中国に住む子どもたちの「レジリエンス」と「主観的ウェルビーイング」に影響を及ぼす要因の分析

本調査では、相関分析、重回帰分析、パス解析を用いて、中国に住む子どもたちの「心理的レジリエンス」と「主観的ウェルビーイング」に影響を及ぼす要因の分析を行った。

2.3.1 中国に住む子どもたちの「レジリエンス」に影響を及ぼす要因の分析

図 2-15 は、中国に住む子どもたちの「心理的レジリエンス」に大きな影響を及ぼす変数を重回帰法により分析した結果をまとめたものである。

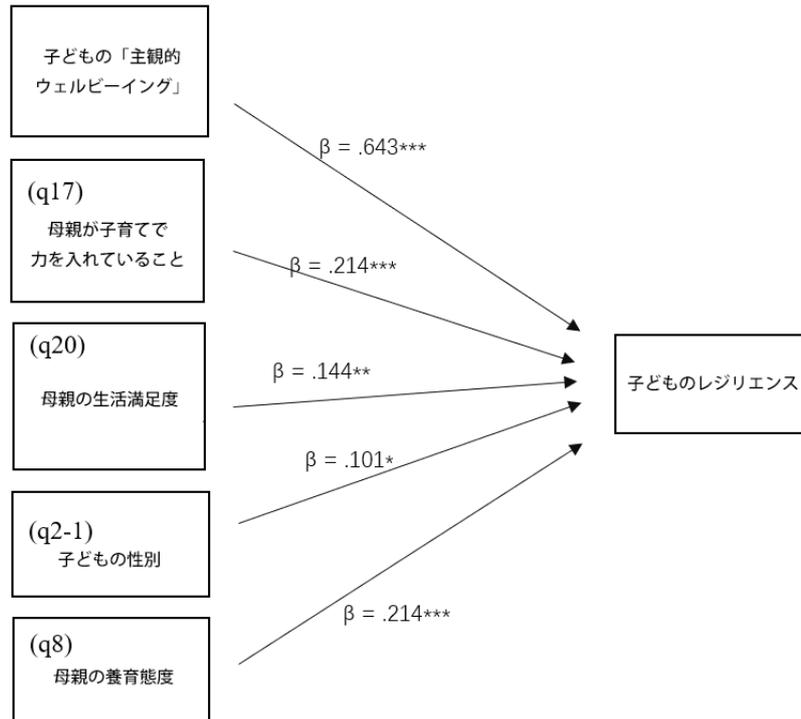


図 2-15 中国に住む子どもたちの「レジリエンス」に大きな影響を及ぼす要因

図 2-15 が示すように、最も影響を及ぼす要因は、子どもたちの「主観的ウェルビーイング」と母親の「養育態度」(両方の変数とも $P < .001$) で、2 番目に影響を及ぼす要因は、母親の「子育てや生活に対する満足度」($P < .01$) であることがわかった。一方、「性別」と「親子関係」も関連性があるものの、有意性は $p < .05$ であった。

現在、「デジタルメディアの視聴時間」が問題になっている。子どものデジタルメディア活用に対する親の態度や行動は、子どもの「レジリエンス」にどのような影響を及ぼすのだろうか？ 図 2-16 はその答えを表したものである。

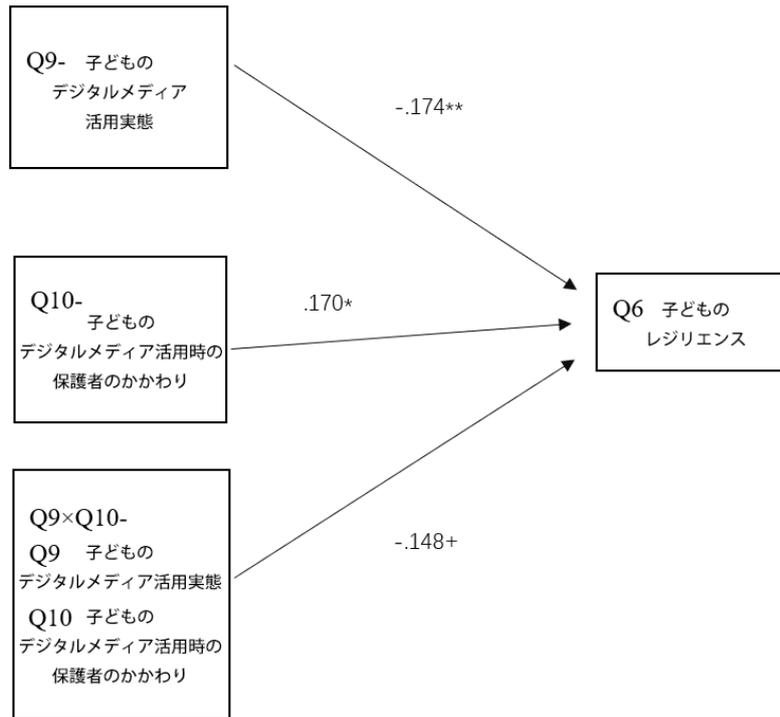


図 2-16 デジタルメディアの制限の有無が
子どもの心理的レジリエンスに及ぼす影響

図 2-16 が示すように、子どもがデジタルメディアを頻繁に活用するほど、「心理的レジリエンス」が低くなる。従って、負の相関係数が存在する。相関係数は0.174と低水準であるが、有意性は $P < .01$ である。一方、興味深いことに、親が子どものデジタルメディア活用を監督している場合にも、子どもの「心理的レジリエンス」とは正の相関関係が見られ、有意性も $P < .01$ となっている。しかし、子どもの「デジタルメディア活用の頻度」と「デジタルメディア活用時の保護者のかかわり」を組み合わせた場合、「デジタルメディア活用時の保護者のかかわり」が負の影響を緩和させているものの、「デジタルメディア活用の頻度」と「心理的レジリエンス」の間には負の相関係数が依然として存在する。従って、子どもがデジタルメディアを頻繁に活用するほど、「心理的レジリエンス」が低くなるという現象は変わらないことがわかった。

2.3.2 中国に住む子どもたちの「主観的ウェルビーイング」に影響を及ぼす要因の分析

図 2-17 は、中国に住む子どもたちの「主観的ウェルビーイング」に大きな影響を及ぼす変数を重回帰法により分析した結果をまとめたものである。

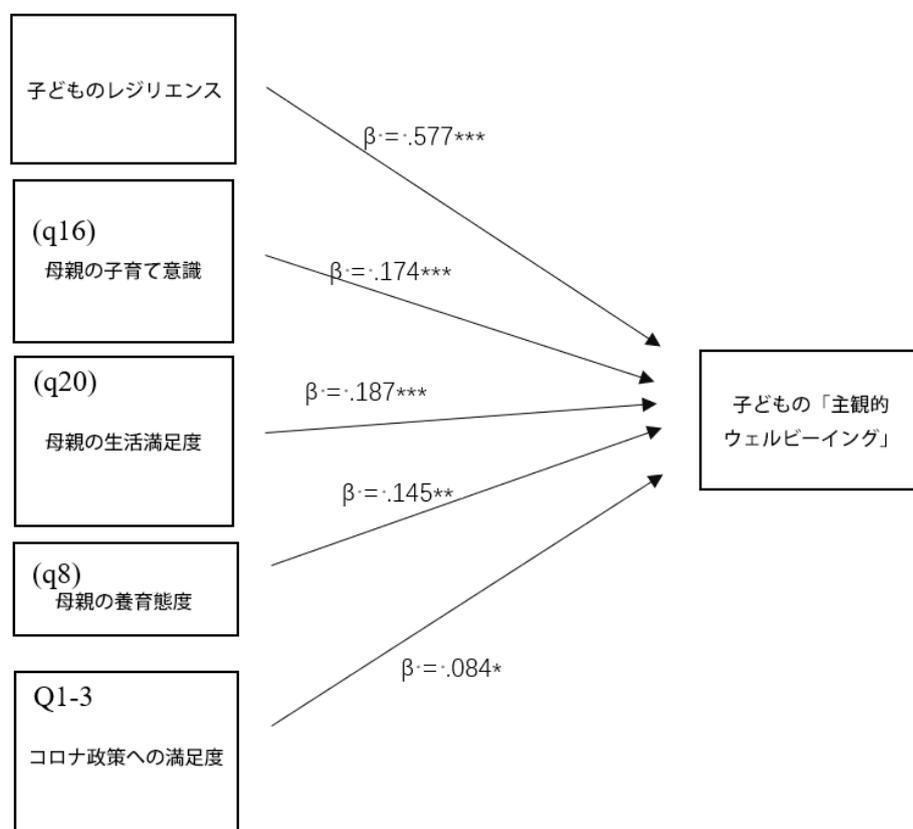


図 2-17 子どもたちの「主観的ウェルビーイング」に影響を及ぼす要因

図 2-17 が示すように、最も影響を及ぼす要因は、子どもの「レジリエンス」、母親の「子育て意識」と「生活満足度」(これら 3 つの変数全てが $P < .001$) で、2 番目に影響を及ぼす要因は、「母親の養育態度」($P < .01$) であることがわかった。一方、「コロナ禍における国・地域の対応に対する満足度」も影響力はあるものの、有意性は $p < .05$ であった。

2.3.3 中国に住む子どもたちの「レジリエンス」と「主観的ウェルビーイング」に影響を及ぼす包括的要因の分析

図 2-19 は、中国に住む子どもたちの「心理的レジリエンス」と「主観的ウェルビ

ーイング」に影響を及ぼす包括的要因について、パス解析法を用いて分析した結果をまとめたものである。

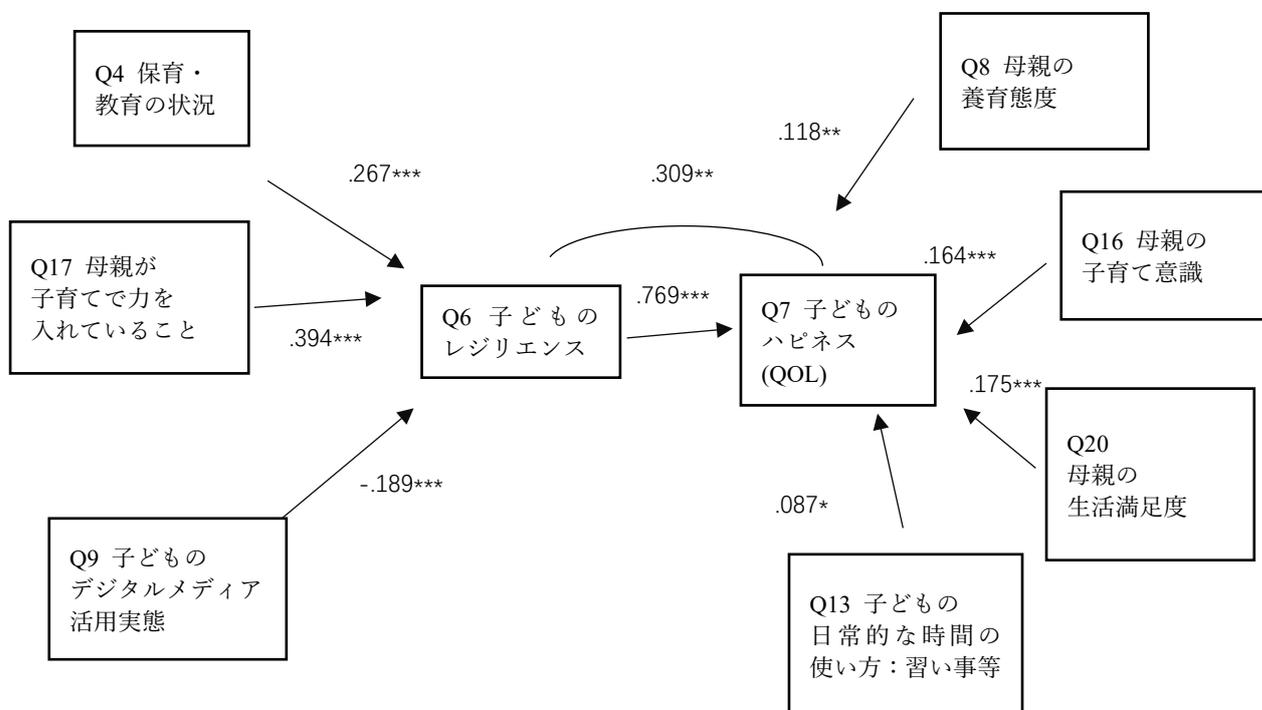


図 2-18 子どもたちの「レジリエンス」と「主観的ウェルビーイング」に影響を及ぼす要因(パス解析)

注: 大半の相関係数と全ての変数はパスマップから除外している。係数には「標準化係数」を用いている。

図 2-18 が示すように、「保育者/先生の温かい態度」と「母親の肯定的な養育態度」は子どもの「心理的レジリエンス」にポジティブな影響を及ぼしている一方で、「デジタルメディア活用」は「心理的レジリエンス」にネガティブな影響を及ぼしている。これら 3 つの変数の有意性は $P < .001$ であり、強い影響力を示している。

同時に、子どもの「主観的ウェルビーイング」に最も影響を及ぼす要因は「心理的レジリエンス」であり、相関係数は 0.769 と、高い水準を示している ($P < .001$)。また、子どもの「主観的ウェルビーイング」と最も重要な正の相関関係を示している変数は、母親の「子育て意識」と「母親の生活満足度」で、相関の有意性は $P < 0.001$

であった。さらに、「母親の養育態度」も、子どもの「主観的ウェルビーイング」の発達に寄与している($P < 0.01$)。

こうした分析の結果をまとめると、中国に住む子どもたちの「心理的レジリエンス」と「主観的ウェルビーイング」との間には強い相関関係が存在することがわかった。また、母親の「養育態度」、「子育て意識」、「母親の生活満足度」、「応答的な養育態度」、「温かい保育者/先生の態度」は、子どもの「心理的レジリエンス」と「主観的ウェルビーイング」にポジティブな影響を及ぼし、「デジタルメディアの活用」はネガティブな影響を及ぼしていることも確認された。

注:Q16 は因子的に課題があるため、今後再検討する。

謝辞

データ収集に協力してくださった Wonderland Education Group 社、並びにデータ処理を手伝ってくださった Zhu Menghan 氏と Yin Xianrui 氏に心より感謝申し上げます。

周 念麗

2022 年 1 月 10 日、上海にて